
迷路ディ

伊東 光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷路デイ

【NZコード】

N0111D

【作者名】

伊東光

【あらすじ】

謎多き二人の大学生、織田と大神が様々な日常や事件に首を突っ込んでいく物語。

清美が夜遅く、自宅のマンションのソファの上で、高校生のとき
にハマッた現実では考えられないほどありえない展開だらけの恋愛
小説を読み返しているときだった。ふいに携帯電話から無機質なメ
ロディがなった。

「どちらさまでしょうか」分かつてはいるが尋ねてみる。

「織田だよ。君の命の恩人であり、例の件に関して君へ報告義務
をもつている織田茂だよ」

織田のその言い方に若干の怒りを覚えた清美は言い返した。

「訂正事項、第一にわたしはアンタに命を救われた記憶はない。
第一に、あの事件のことを誇張して言つているのなら、あのとき救
急車を呼んでもくれたのはあんたじやない。第三に……」

「ストップ、ストップ。わかつた、俺が悪かつた。」

清美が喋りうとするのさえぎり、ふたたび織田が喋りだした。

「例の件に関してだが、仁^{じん}は土曜日になら都合がつくそうだ」

織田が、まるでスパイ同士の会話のように声を潜めて言つた。

「なるほど、了解した。で、場所と時刻は

清美が織田の真似をして返すと、

「ははは、何だよその喋り方は。どうかしたのかよ

などと織田はいった。

「まあ、そんなことより、土曜朝九時に俺の家に集合な。仁にも
言つといてくれ」

「ちよ、ちよっと。何であたしが

清美の文句が届く前に織田は電話を切つた。

「ありえない」

清美はそつそつと、手に持つたままの携帯電話と恋愛小説を交
互に見比べながら思つ。

そういうえば、私たちの出会いはこの恋愛小説以上にありえない展

開からだつたな、と。

半年前のホワイトクリスマス。清美は同僚の女性社員から誘われた合コンを断り家路に着くところだつた。プスッ、という音とともに清美は全身の力が抜けるのを感じた。目の前を全身黒ずくめの人物が立ち去ろうとしている。

清美は、自分が完全に倒れきる前に起きた出来事をコマ送りで見るよう見た。

まず、赤と黄の二色のボールが清美の顔の脇を通り過ぎた。赤のボールは途中で力尽き道路の真ん中に落ちて割れた。黄色のボールも、力尽きたと思ったが黒ずくめの人物の足に当たり破裂した。が、謎の人物は全く動じることなく全力疾走で立ち去つた。

清美の前に一人の青年が走り寄つてきた。一人ともまだ大学生くらいかな、と清美は思つた。一人とも瘦せ方の長身であり、一人はぼさぼさの黒髪で若干太い眉が特徴的な、カラスのような印象を与える青年だつた。もう一人はさらさらな金髪できりりとした瞳を持つ、強いて例えるなら、恥ずかしい言い方だが、天使のようだつた。

目が覚めたときとき、清美はベッドの上にいた。殺風景かつ清潔すぎる部屋と自分の腕にさされている点滴をみて、ああ、自分は病院にいるのか、と気が付いた。

しばらくぼんやりとしていると、ドアが開いて、「お、眼覚めたんだ」と言いながらカラスのようなあの青年が病室に入つてきた。

「よかつたな、医者の話では傷は浅くて傷跡も残らないらしそ」と妙になれなれしく続けると、

「俺は、織田茂だ。ちなみに今は果物を買いにいって、いながもう一人はお前のために救急車を呼んだ英雄、その名も大神仁だ」と、言つた。

「ありがとう。助けてくれて。ところで…」

清美が織田へ問い合わせようとしたところで、もう一人の青年「大神仁」が病室へ入つてきた。

「あれ、眼が覚めたんだ。良かつた。茂、彼女に自己紹介はしたのかい？」

「ああ、もちろん。お前の分もサービスで言つとこてやつたよ」「あの、いいかしら？あなたたちに聞きたいことがあるんだけど、清美が問い合わせると、「かまわないぜ」「もちろん」と一人から返事が返つてくるので、続ける。

「ええと、まず第一に、私にいつたい何が起つたの？第一にあなたたちはいつたい誰？第三に、あなたたちはあの犯人に何を投げつけたの？最後にそこのアンタはどうしてそうなれなれしいのよ」清美は早口で言つながら最後に織田のことを指差した。

「うむせー。よくもこつ、つきからつまに言葉がでてくるよな」織田が愚痴をこぼしているのを脇で聞きつつ、大神が苦笑しながら答えた。

「すいません、茂は誰に対してもこの調子なんですよ。許してやつてください」

「いや、でもよ。実際のところ敬語を使つてことはよ、自分を相手より格下な存在と認めることがねえかよ」と、織田が言い終わるのを待つてから、大神が話を戻した。

「質問にはまとめて答えさせてもらいまよ」と前置きしてから、「僕たちはただのじがない大学一年生ですよ。通りすがりのね。あなたに起きた事を説明すると、あなたはたぶん、通り魔に刺されたんですよ」

そう言うと大神は最近清美たちの住む都市で、起つてている連続通り魔の犯行かもしれないですねと、にこやかに答えてから、「ちなみに、僕らが投げつけたあれば、当たると割れあたりに特殊な塗料をまきちらすものですよ」と残つた問い合わせにも答えると、「リンクは好きですか」と尋ねた。

「すみません、茂のヤツ、自分の家の住所も教えなかつたみたいで」

「ううん、全然いいのよ」清美は言いながら、隣に立つ大神の姿を観察した。完璧だった。その姿もさることながら礼儀正しい態度はとても好ましかった。いや、それだけではない。彼から発せられる神々しい魅力というか、オーラというか、とにかくそういう何かが大神には確かにあった。

織田からの連絡を受けとほうにくれた清美は、さつそく大神に電話した。すると、大神は織田にすぐさまメールを送り、集合場所を地元では有名な記念碑のある公園に変更させた。

約束した時間の十分前に、清美が記念碑のところへ行くとすでに大神が待っていた。

時間になつても織田が来ないので、清美は大神との会話を再開させた。

「でもよく見つけられたわね。大変だつたんじゃないの」と、柄にもなく大神のことを気遣つた。

「いえ、僕らが呼びかけるだけで大概のことなら手伝ってくれる友達が大勢いるので、一日前の午前中にはこの情報が手に入りましたよ」

「へえ、いい友達に恵まれているのね」適当に返す。

すると、大神は「いえ、ちょっと違うんですよ」とイタズラっぽく笑つた。

待ち合わせた時間より七、八分遅れて織田が姿をあらわすと悪びれもせず言つた、

「よし、お前ら全員いるな。じゃあ、行くか」

「ちょっと待ちなさいよ。遅れてきてあやまりもしないわけ」

「当たり前だろ、勝手に集合場所を変えたのはそっちなんだからよ」

清美は助けを請うような眼で大神を見たがあつさりと無視された。

清美が不審者に刺され、病院を退院するまでの三週間。織田と大神の二人は、ほぼ毎日のようになぜか見舞いに来た。その間に清美

は、織田が清美に対して一切の敬語を使わないと対して文句をつけなくなつた。単純にめんどくさいと言うのもあつたが、なにより敬語を強要すると自分が彼らよりも人生において先輩であることを思い出してしまったからだ。清美は、同級生のようになり人と話せることがうれしかつた。

清美が医者から、あと一週間後には無事退院できますよ、と聞かされた翌日の午後だつた。

「なあなあ、仕返ししてやりたいとか思わないのかよ」と織田から持ちかけられた。

「何に対しても」

清美が尋ねると、

「通り魔だよ。ヤツに借りを返してやるうぜ」

「そんなこと、警察に任しておけばいいのよ」

「十年前から数えて八千六百件」

いきなり大神が口をはさんだ。

「なんのこと?」

「この都市で起こつた未解決の事件の数だよ」

「うそ……」嘘でしょ、と頭の中に鳴り響く。それでも、法治国家なのかなよ、と思う。

「警察つてのはよ、見つけることと解決することが苦手な上に、誤魔化すことが大得意なんだよな」と、織田が言う。

「だからさ、この際犯人探しは俺らでやるうづ。絶対みつけてやるよ」

と、いうわけで清美たち三人はその犯人のもとへ行つて出頭するようになつた。犯人の家へは、バスで行くんだ、と大神は言った。割とすいてい

るバスの中で清美は一人に聞いた。

「どうして今から行くアパートの住人が犯人だつて分かるわけ」

「んなことも分からぬのかよ。おいだよ、おい。罪を隠し

ている人間独特のにおいをかいで断定したんだよ」などと織田は言った。

「大神君、本当はどうやつたの？」

「特殊な塗料を使ったカラー・ボールを犯人の脚あたりに当てたでしょ。あの塗料が付着した衣服を探させたんですよ」

「そんなことが出来るわけなの？」

無理だ、と清美は思つた。広いこの都市からどうやつたら塗料つきの衣服など探し当たられるというのだ。だいたいにして、犯人も馬鹿ではあるまい。塗料の付いた衣服など洗うか、さもなければ捨てるはすだ、少なくとも私ならそうする。

と、いつた趣旨を大神に伝えた。

「特殊な、と言つたでしょ。あの塗料は時間がたつと消えて、上から特殊な光りを当てないと見れなくなるんだ。それに、特殊な水溶液を使わないと落とすことも出来ない」

「ふーん。また、ずいぶんと特殊づくしなのね」

「ところで、あの時犯人にそのボールを当てたのは、どっちだったの？」

「ああ、それは僕のほうだよ」と大神が誇らしげに言つた。

「ああ、俺は外れたほうだよ」と織田が悲しげに言つた。

その後ぐだらない雑談話に花を咲かせながら、気が付くとバスは終点に到着していた。

「ここからどうするの？」

清美が尋ねると「確かに、こっちの方向だよ」と大神が歩き出し、つられて織田と清美は付いていった。

フツーのアパートだった。寂れて老朽化しているわけでもなく、まさしく悪の巣窟、といった感じでもない。悪く言えば平凡、良く言つても平凡。ただただ、フツーだった。

一階へあがり織田が一室のチャイムを鳴らした。チャイムの音も

平凡。ただ、なかなか人が出てこなつかった。

「もしもし、誰かいるのかー」

織田がしつこいくらいにチャイムを鳴らす。が、応答なし。

「あんたたちも記者なのかい」

三人が横を向くと初老の人のよさそうな男が立つていた。

男は亀井と名乗りこのアパートの管理人だと明かした。

「あの…。お茶まで出して頂いて、かえつてどうもすみません」

三人は亀井に招かれアパートの一階にある亀井の自室にいた。清美が謝ると、亀井が、

「いえ、こちらこそ。こんなのが出せなくて」とさらりと謝り返した。

「そんなことよりも、これは一体全体どういうことなんだよ」

織田がわめき散らす。

管理人の亀井からはいくつかの話が聞けた。二日前の深夜、織田がチャイムを押し続けた部屋に住む中里という男が、警察により傷害の現行犯で捕まつたこと。取調べによりその男が三人の住んでいる都市に出没していた通り魔である可能性が高いこと。その結果昨日には数多くの報道関係者がこのアパートを訪れたこと。したがつて亀井が、しつこくチャイムを鳴らす織田を見て一日遅れでやつてきた報道関係者だとかんちがいしたこと、などなど。

清美はアパートに来た目的を亀井にはあいまいな表現でごまかした。

帰り道、妙にしょぼくれた織田のことが心配で声を掛けた。

「どうかしたの」

「悔しい…」

清美は織田が情けない落ち込んだ声で返してきたのには驚いた。

「何がよ、犯人が捕まつて良かつたじゃないの」

織田が次に返してくる言葉に清美は啞然とし、脇で一人のやり取りを聞いていた大神はとても愉快な気分になつた。

「なんで警察が苦手な分野で俺が負けるんだよー」

解決

太陽編（前書き）

清美編の次の日、織田と大神は新たな暇つぶしを見つける……。

六月、日曜日の喫茶店で一人、推理小説を読んでいたときだつた。
「陽介くんじゃないか」という声に振り向くと、そこには同じテニスサークルに所属している一年上の先輩である大神が立つていた。ハツと息を呑む。

「どうも、先輩。最近サークルに来ないんですけど、どーかしたんですか」

大神はいつの間にか陽介と向かい合うように椅子に腰掛けていた。

「大したことじゃないよ。それにその問題はあっけなく昨日、解決した。いや、三日前かな」と大神がほほえみながら喋るのをよそに、陽介は考えていた。

大神はとにかく不思議な男だつた。キリリとした瞳、高い鼻、整つた顔、痩せ型の長身で染めた金髪が良く似合う。かつこいい、のではなく「美しい」。周りを虜にしてしまうオーラを持っている。こういう人間こそ人間国宝にふさわしい。いや世界遺産として残すべきだ、と半分本気で思う。

女性からも人気が高いらしく、ファンクラブが結成され、彼のためならなんでもすると豪語する会員もいると聞く。彼がテニスコートに立つた日にはあたりを他の野次馬が近寄れないようにしてしまうことがあるほどだつた。

ただ、大半の学生が疑問視していることがある。それは、彼が女性と交際しているとの噂が一切ないことだつた。同じ学部の女子によると彼の交友関係は極端に狭く、友人として上げられるのは大神と同級生の「織田茂」ただ一人だそうだ。眉唾ものだが、彼女が「大神仁ファンクラブ」の副会長であることと、彼とサークル内で頻繁に会話するのは自分ぐらいだということに気づき一応信じている。

「ところで陽介くん、今日ひま?」と大神が尋ねてくるので、

「はい、ヒマツすよ」と答えた。実際午後からあるはずだつた講

義は、学会の準備とやらで潰れてしまっていた。

「良かつた、一緒に来てくれ。君を待つていてる奴がいるんだ」

そういわれて大神に連れて行かれたのは、駅前にあるファーストフード店の一階だった。

「よう、案外早かつたな。もつとかかるかと思つたぜ」窓から最もはなれた席に座つている男がハンバーガーをほおばりながら、大声であきらかに大神を呼んできた。

「やあ、食事中なのに悪かつたね。」

「気にすんなつての。もともと俺から持ち掛けたんだからよ。そいつがが？」

「ああ、そうだよ。彼が日野陽介くんだ。陽介くん、こいつは織田茂だ」

大神は確かに自分を待つていてる人がいると言つていたよな、と陽介は考えた。なぜ面識のない織田が自分に会いたがつたのだろう。考えられるのは大神が自分のことを織田に喋つたから、だろう。陽介は自分の考えを否定した。友人から話を聞いただけで、その相手を呼び出す人間などあまりいらないだろう。が、違つた。

「いやー仁から話を聞いたときピーンときたぜ。お前に会うべきだつてな」

「は？」なんで。

「うんうん、いいねえ。悩んでる男の顔は」

「え？」 いつたい。

「お前の片思い、俺が成就させてやるよ」

「…………」知つているんだ？

織田が大神から日野陽介の話を聞いたのは昨日の晩、携帯電話からだつた。

織田はその日、半年かけてきた計画を失敗していた。自分に責任の一端があるわけがない失敗だった。それゆえに失意の中で希望を

なくしていた。

そんなときだつた。大神から電話がきた。最初はシカトしようかとも思ったが気が変わつた。理由はなんとなく、だ。

「へこんでるかい」と、大神は尋ねた。

「そんな会があつたら、俺は名誉会員だ」

織田が適当に返す。

「俺は今、迷路の中でメロメロになつて迷つてているんだ」
くだらない洒落が続くな、と大神は思いつつ「迷路かい?」と、聞く。

「いいか、大神。よく聞けよ」

「なんだい?」

「その通り。人生は迷路なんだよ、真つ暗いな。しかも超がつくほど難題だ。みんな楽して最短ルートでゴールしようとしゃがる。ただな、どうしたつて誰もが何回も行き止まりにぶつかってしまうんだよ」

大神は苦笑してしまう。が、織田は気にしない。

「でもな、迷路なんだから行き止まりにぶつかつても引き返せるんだよ。間に合つんだよ…。そつだろ」

と言つたきり織田は黙りこくつた。

「茂、大丈夫かい」「…………」「なんなら、いつしょに迷路を進もうか」「…………」「おもしろい話、あるけど」「…………」少しだが反応があつたので大神は田野という後輩の片思いの話を聞かせた。

大神が話終わると織田はさつままでとは打つて変わつてテンションがあがつていた。

「仁、ナイスだ。今度はそいつがターゲットだ。明日そいつに会わせてくれ。絶対くつづけてやる。お前の部下共も総動員するぞ。明日が楽しみだ」

「部下つて…」

大神は陽介には悪いと思っていなかつた。まあ、いいかな。そんな

気分だつた。

「…というわけで話した」

大神が言うと、陽介が「そりゃないつしょ」と文句を言った。

「じゃあ俺の恋愛話はそこのへこんでいた織田先輩を笑わせるの
ために使われたんですか」

「ただ笑わせるためじゃない。茂が調子を戻せるように有効利用
したんだよ」

「変わりませんよ」

「それでも、お前は大学生にもなつて恋愛ぐらい一人で出来
ないのかよ」

織田に指摘されると、陽介が「ちがうんですよ」といつた。

「俺が好きになった人の名前、大神さんに教えましたっけ

「いや、聞いてないけど。誰なの？」

「月山兎さんというんですけど…」

陽介が喋るのを遮るかのように織田が声を上げた。

「ほう！ それはいい！！ お前たち名前の相性はこれ以上ないつて
くらいバツチリだ。日野陽介と月山兎、太陽と月。両方あるからす
ばらしい。お前らは間違いなくくつつくぞ、日食や月食のようにな

「何言つてんですかこの人は」

陽介が大神に尋ねると

「許してやつてくれ、茂はこいついうやつなんだ」

と、大神は嫌がるのでも友を馬鹿にした眼で見るのでなく、織田
を愛おしそうにみつめた。

「ごめんね陽介君。で、話の続きを？」

「その月山さんに本当は今日、告白するつもりだったんですよ
と陽介が言うと、大神と織田の二人が同時に口を動かした。

「それはおめでとう」

「それはないだろう」

陽介が、「月山さんは という居酒屋で働いている」と言つので、

一旦は解散して店の開く午後六時にその店に集合するよしひと織田
は言った。

陽介が断つても織田は聞く耳を持たず、拳句の果てに大神までノ
リノリだった。

Each Rest編（前書き）

一旦は解散した三人の向かう先とは……。

（月）

開店一時間前、店長や同僚よりも早く来て推理小説を読みながら店内の掃除をする。それが月山にとつてはとても幸福でいられる時間だった。本を読み進めながら、華麗な推理をしてみせる探偵のごとく、今日店に訪れる客はどんな客かを憶測と勘だけで構築される推理で脳内を満たすのだ。

（太陽）

偶然だが、陽介と織田はまったく同じ方法で暇をつぶそつとしていた。

「織田先輩、なんでこの映画観ようと思つたんですか？」

「なんとなくだよ。大体にして映画を観るのにいちいち理由をつけるヤツなんかいないだろうが。人気があるからなんとなく観にきました、とか監督が好きだからなんとなく観にきました、って感じだろ」

陽介は一人と別れた後、映画館へ向かつた。

前々から観たいと思っていた映画のチケットを購入したときだつた。後ろから「ほう、お前もその映画を観るのか」と、織田に声をかけられた。どうやら織田も映画を観に来たらしい。

「先輩、やつきの理屈は、なんとなく、ってフレーズをばぶけば立派な理由になると思うんですけど」

陽介がポップコーンを買つために売店の列に混ざりながら言つた。織田も陽介の後に並びながら、「ところで、この映画はどういう内容なんだ」とたずねる。

映画が始まる前の予告のとき、織田の理不尽な騒々しさに陽介は不安を覚えた。が、実際映画が始まると織田はつそのように真剣な

顔で、じつと映画に観入っていた。

「大神」

「すみません、いきなり訪れて」

「いいわよ。日曜は暇なの。大神君、今日は用事があるって昨日
言つてなかつたつけ」

と言いながら、キッチンから持つてきた紅茶の入つたティーポッド
とカップ二つをテーブルの上に置いた。

「嘘付いちやいました」

と大神は返す。

大神は清美のマンションへとやつて来ていた。織田に内緒で、だ。
「ところで、あのうるさいヤツがアンタと一緒にやないわね、大
丈夫なの？」

清美が心配そうに尋ねてくるので大神は答える。昨日の一件から織
田は立ち直つたこと、それは後輩の恋愛話のおかげだと言つこと、
実は六時からその後輩が告白をしに行くので待ち合わせをしている
こと、その間の暇つぶしに織田は映画を見に行つたが自分はその映
画に興味がないこと、などなど。

一通り話しあつた後、清美は口を開いた。

「なるほど。そういう言つてで我が家があなたの暇つぶし場所に
選ばれたのね」

「違いますよ」と大神はほほえんで返しながら紅茶を口に含んだ。
「実のところ、清美さんに相談があるんですよ」

「なあに？」

「コイつてどんな感じなんですかね」

清美はその質問に呆れた。

「それだけのためにわざわざ來たの。そんなの携帯電話使えば楽
じゃない」

そう言いながら、空に向かつて指を動かせる。

大神はその答えに呆れた。

「魚の鯉じやないですよ。恋愛のことですよ。ちなみに、一回も誰とも付き合つたことがありません」

本来なら、自嘲氣味に話すべきなのに大神は堂々と言い切った。

「わっ、わかつてゐわよ」

清美の頬は薄く紅潮した。気を取り直して「でも意外ね」と言つ。

「でも意外ね、そんなに格好いいのに。やっぱり天使はそういう

世俗的なことに興味がないのかしら」

「天使?何のことです?」

「ううん、なんでもない」

「僕がその後輩に恋愛の相談を受けたときこう思つたんですよ。

」ういうのは茂か清美さんに尋ねるべきだ、とね

「なるほど、織田に後輩の話をしたのは織田を復活させるためだけじゃなかつたのね」

「まあ、そういう訳です」

それから清美は今までの自分の体験談と、適当にでっしき上げた恋愛の法則を大神に話して聞かせた。

清美が話しあつた後大神は「なるほど」と言つて小さく頷いた。

「参考になつたかしら」

「ええ、とも。清美さんは今、誰かと付き合つてゐるんですか

「わたしの恋愛は四年前で止まつてゐるのよ」

清美は若干げんなりとした顔で答えた。

（太陽）

映画を観終わり織田と陽介は館外で見つけたベンチに腰掛け、それぞれパンフレットを読んでいるときだった。織田の携帯電話から着信メロディがなる。織田は電話に出ると、「申す、申す。」と奇怪な言動をとる。

「先輩、何言つてんですか？」

織田はめんどくさそうにこっちを見て言つ。

「あんな、電話に出るとき、もしもしつていうだろ。あれはもともと昔電話の交換手がかけてきた相手にこう言つたのが始まりなんだよ。申す申す、かける相手とその後用件は何ですか、つてな」そう言つと織田はかけてきた相手に「いやなに、出来の悪い後輩に教え諭していったところだよ」と言つた。

その後の織田は「ほう、なんと」や「それはいいじゃないか」などと言つばかりなので陽介は喋つてている内容を聞き取ることはできなかつた。ただ、最後に「わかつたよ、仁」と織田が言つのでかけてきた相手だけは分かつた。

電話を切り、織田が陽介に向つて言つ。

「さあ、行こうぜ」

六時になつても大神が来ないので仕方なく陽介は織田と共に居酒屋に入つた。

意外と混んでいたが、従業員に後からもう一人来るので、椅子に腰掛ける。織田はすでに何を頼もうかとメニュー表を見ていた。

「生、二つ」

織田が従業員にいうのを聞きながら、月山さんはどこかと田を凝らす。が、見当たらぬ。しばらくキヨロキヨロしていると、織田が

声をかけてきた。

「お前な、そんなに見ていると店のどつかに穴が開くぞ」

「あ、開くわけないじゃないですか」

陽介が赤面しつつ答えると、

「そんなに気になるなら、従業員に用島つて女を呼ばせたらい
じやないか」

と返された。その言い方には腹が立つたが、それも一理あるな、と
も思わなくもない。

「そんな言い方は失礼ですよ」

「うるせえな。んなこと知るかつての」

うるさいのは織田のほうだし、喋りかけてきたくせに知らないとは
どういうことだ、と怒鳴りたいのをこらえた。

その後は、従業員の持ってきたビールを一人でちびりちびりとや
りながら、大学でのことをお互に話した。ハゲをぐらで隠してい
るのがバレバレの教授の話なんかもそれなりにおもしろかったし、
なによりうるさいとしか思つていなかつた織田との会話がとても楽
しかつた。たぶんお酒の影響が関係しているのだろう。

二十分ばかり喋っていると、大神が大人の雰囲気をかもし出した
女性を一人連れやつてきた。なんだ、先輩にも彼女、いるじゃない
か。と、大神について語つていたあの女子を馬鹿にした。

「よう、遅かったな。仁、清美。早く座れよ」

「じめん、茂。悪かったよ」「悪かったわね、遅れて。あら、そ
の子が？」

清美と呼ばれた女性が、陽介に自己紹介をした。

「こんばんわ、わたしが清美よ。ちなみに、こいつらとはちょ
とした事件で知り合つた、まあ友人のようなものね」

「ど、ども。日野です」どうやら大神の彼女ではないよつだ。
すなわちあの女子の言い分のほうが正しかつたようだ。

「あのなんであなたが？」陽介はなるべく失礼にならないようこ
尋ねた。

「え、織田から聞いてないの」

「は、はい」

「ダメじゃないか、茂」そういう大神の声には織田をとがめる響きはない。

「だつてよ。教えてたらちつともおもしろくないじゃないか」織田に反省の色はなかつた。

「おもしろくなくていいのよ」やつ言ひ清美はヤレヤレといった感じで首を横に振つた。

陽介は一人だけ疎外感を感じたので三人に向つて言ひつ。

「ところで、月山さんはどこにいるんでしようね」

「そういうえばまだ見つけてないよな、お前の彼女

「まだ決まつたわけじゃないんですから」

そう言つと「大船に乗つたつもりでいろ。この俺がいるから大丈夫だ」と、織田は言つ。かなり小さい泥舟に乗つた気分だ。

「なんだ、まだだつたの」

「ええ、まあ。いつたい、どこにいるのや」

そう言つたとき、お盆を両の手に乗せて通路を歩く月山の姿を見た。混んでいたから見つけられなかつたのではと、三人に言つと、「ほう、あれが」、「陽介くん、なかなか可愛いらしく子じゃないか」、「あら、本当」と、思い思いの感想を言われた。

しかし、その後三十分ぐらいたつても彼女が一いちばん側に来ないのに、腹を立てて織田は食事する場所での発言としては考えられないことを言つた。

「ああ、もうじれつたい。ちょっとウンコに行つてくるわ

そつ言い残して織田は席を立つた。

織田がいなくなつてからすぐに清美が喋りかけてきた。

「そういえば、陽介君は織田と映画を観に行つたのよね。何を観たの?」

「一緒に観に行つたわけじゃないんですけど」と陽介は苦笑ながら

ら、観た映画のタイトルを伝えた。

「『ポリス・ラビリンス』ですよ。新米警官とベテラン警官とのヤツ」

と陽介が言ったところで、大神が声を上げた。

「え！ 茂がその映画を観たのかい」

「はい。それがどうかしたんですか？」

「いや別に……」

大神が言いよどんだところで清美が言った。

「そういえば、あいつって警察のことが嫌いなのがも」

「え？」

陽介が話の全貌を捉えられずになると大神は「実はね……」と話し始めた。

「実は、茂の父親は警察官だったんだよ」

「へー。そうだったの」

「もしかして、父親への反抗心で警察が嫌いになつた、とかですか」

織田のことならありえなくもない。だが、大神の口調からもつともつとずつと深刻なことなのではないのかとも思う。

「四年前に起きた警察官殺傷事件のことを知つているかい」

もちろん知つていた。いや、覚えていた。あれはなかなか印象強い事件だつた。

四年前、陽介がまだ高校生活を満喫しているときにその事件は起つた。

当時、陽介たちが住む街ではかなり悪質な押し込み強盗が頻繁に起つていた……。

太陽編～武～（後書き）

早めに次の章へ進もうと思っていたのにまた延長してしまった結果になり、申し訳ありません。
これからもどんどんと、書いていいいつと黙りのできるしくお願いします。

名探偵織田茂の華麗なる推理～プロローグ～（前書き）

前話の回想シーンからは飛びますが、「容赦ください」。

名探偵織田茂の華麗なる推理～プロローグ～

月曜の朝早くから大神恢かいは朝食もとらずに、自宅の書斎で医療関係の論文に眼を通してゐるところだった。

一階の、それも恐らくは玄関口から妻の天子てんしが自分を呼ぶ声が聞こえた。

「どうかしたのか」

ドアを半開きにさせて尋ねると、二十年以上聞いてきた声が聞こえた。

「お邪魔します、天子さん。冗談のヤツ、また書斎にこもつてるんですね」

ああ、間違いない。あの声の持ち主こそ我が親愛なる弟君おとうじきみ、大神仁じんその人だろう。面倒くさい。

「すいません、こいつぐるんぐるんに酔つてるみたいで」

「ウイーう」

「あら、茂君じやないの」

なんてことだ、あいつもいつしょにいるのか。

「よかつたら一人とも私たちと一緒に朝あさはん、食べない？」

やめてくれ、天子よ。

「はい、喜んで」

終つた……。

「はい、茂君お水」

「ど、ども」

茂が天子から受け取つた水を飲み干すのを待つてから、恢は仁じんと茂に尋ねた。

「で、なんでだ」

「兄貴の問いかけは昔から抽象的過ぎるよ

「モのぐおとは、ぐていタキにだ」

恐らくは「物事は具体的に語るべきだ」と語っているのだらう。面倒くさい。

「なぜ、月曜の朝早くに来たんだ」

若干、苛立ちながら早口で喋ると、はつきりした口調で「何曜ならいいんだよ」と茂が返した。

「はいはい、口論はそこまで。ご飯でも食べて落ち着いて」天子がそういうながら、テーブルの上に四人分の箸とご飯茶碗、そしてベーコンエッグと器に移した納豆を置いた。

四人で食事を始めてから数分後、再び恢は尋ねた。

「何の用でうちに来たんだ」

仁がベーコンをほう張りながら答える。

「あのさ、昨日からちょっと飲みすぎちゃってて」

「の話によると、昨日から知り合いの女性一名と一人の後輩一名、計四人で某居酒屋で朝まで飲んでいたらしい。最初はその後輩が居酒屋の女性従業員に告白するつもりで店に行つたのだが、決心が付く前に当の本人および茂が酔いつぶれてしまい結局どうすることも出来なかつた。そして仕方がないから、後輩と知り合いの女性をそれぞれタクシーに乗せて家に帰し、自分たち二人はこの家に来た。

「納得出来ないな。それでは明確な説明になつていいない」

「いいじゃない、別に。そんなこと言われても、政治家たちでさえ答えられないようなことをこの子達が答えられるわけないじゃないの」

いつも天子の言つことは正しい。

「なんとなく、でしょ仁君」

「ええ、まあ」

「じゃあ、そのなんとなくのついでに、私に協力してね

「僕はね、こう見えても饅頭が怖いんだ」

えー、本当ですかと言ひながら、現実にこんなことを言ひ人がいる
んだと関心してしまつた。

ただ、かつこいい人が言ひとそれはそれで様になるな、とも思つ。
カラスだつたらうるさいだけだ。日本語を喋るカラス、と思つとこ
れはこれで楽しいけど、どうなのかな？

商店街の福引きで四泊五日沖縄旅行が当たつたときは驚いた。た
だただ、驚いた。周囲もビックリ、私もビックリ。たぶん、死んだ
お婆ちゃんもビックリしただらうな、考えすぎかな。

それから一週間後、仕事の休みもとれたので飛行機で那覇空港まで
飛んだ。それから、フェリーで歯車島へ向かう。初めて聞いた島
の名前だつたけれど、やつぱり初めての沖縄旅行だつたから私はウ
キウキしていた、大人げも無く。

そのフェリーで乗り合わせたのが、大神仁と織田茂だつた。二人
とも大学生だと言つ。大神さんは、神秘的な顔立ちだつた。時代が
時代なら、神様のお告げか何かを聞いて宗教を開いて、この時代に
はすつかり四大宗教の一つに数えられていたことだろう。考えすぎ
だし馬鹿らしいなど、口に出してもいないので赤面してしまう。織
田さんは、良く言えばジョントルマンなカラス、だと思つ。ごみを
あさる事は絶対に無いけど、騒がしい。でも、耳障りじゃない。で
も、やつぱりうるさい。これじゃあ、ジョントルマンでもなんでも
ないなと、思い直す。本分を忘れた、ただのカラスだ。

船内で出会つたきつかけは、ちょっと恥ずかしくてあんまり言い
たくない。黙秘権を使用する。

二人は、私とは違つて、旅行代理店でこの旅行をセレクトしたら

しい。何でこんな、って失礼な言い方だけど、無名な島の旅行を選んだのか気になつた。けど、深く聞く気は無かつた。けど、織田さんが語り始めた。やっぱりうるさいカラスだな、と自分の顔がほころぶのを感じつつ、思つてしまつ。本当に、不思議な人達だな。

名探偵織田茂の華麗なる推理～歯車島編～（後書き）

更新が非常に遅くなつて本当にごめんなさい。前話から話が飛んでいますが、これは意図しておこなわれたことです。大神と織田のお話はまだまだ続きます。大神恢や、妻の天子も次回出でくる予定です、はい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0111d/>

迷路ディ

2010年10月9日14時14分発行